

まちづくり研究会(第3期生)
第2班 研究成果報告書

研究テーマ「定住促進とPR」
～プラスワンでオンリーワン～



第1部 小矢部まちビジョンプロジェクトの提案

1. 事業名 「小矢部まちビジョンプロジェクト」

2. 事業実施に至る背景

3. 小矢部市の現状分析

- 3-1. 小矢部市・人口動態の推移
- 3-2. 地方別転入の動き
- 3-3. 小矢部市 地域別年齢別 人口内訳
- 3-4. 小矢部市人口の移り変わり 現状分析のまとめ

4. 事業目的

5. まちなか居住に関するアンケート調査

6. まちなか居住に関する流れ

- 6-1. コンパクトシティ計画(青森市・富山市 等)
- 6-2. まちなかに人を呼び戻す
- 6-3. 低未利用地の用地転換による集合住宅の例
- 6-4. 借り上げ公営住宅の運営
- 6-5. コンバージョン
- 6-6. 修復型まちづくり
- 6-7. 小矢部市にとって どのようなまちづくりが 最適なプランなのか

7. 小矢部まちビジョン プロジェクト

- 7-1. 官民一体 協働のまちづくり
- 7-2. 様々な段階での参加と協働
- 7-3. まとめ

1. 事業名 「小矢部まちビジョン プロジェクト」

2. 事業実施に至る背景

全国的な人口減少が続いている中で、小矢部市もまた人口の高齢化や減少・転出等の問題が続いている。それに伴い山間部や市内中心部(まちなか)での一人暮らしの高齢者問題や買い物をするのにも不自由な買い物難民問題等も出てきている。また、最近ではまちなかを離れる若者世代も多く、中心市街地の空洞化が緊急の課題となりつつある。小矢部市としてもこの問題に様々な取組を行っているが、私達まちづくり研究会3期生としても新たに検証を行ってみたい。

3. 小矢部市の現状分析

まずは小矢部市の現状について、把握・分析を行ってみた。

3-1 小矢部市・人口動態の推移

平成22年12月末

年次	自然動態(人)			社会動態(人)			婚姻(件)	離婚(件)	相対離婚率 離婚数÷ 婚姻数
	出生	死亡	差引	転入	転出	差引			
H8	267	317	-50	721	872	-151	159	31	0.195
H9	249	357	-108	670	858	-188	147	25	0.170
H10	254	333	-79	771	847	-76	175	30	0.171
H11	249	343	-94	726	788	-62	150	25	0.167
H12	280	315	-35	739	884	-145	151	38	0.252
H13	253	313	-60	749	844	-95	177	36	0.203
H14	271	281	-10	737	882	-145	146	42	0.288
H15	248	296	-48	691	783	-92	172	45	0.262
H16	247	372	-125	640	774	-134	176	36	0.205
H17	232	375	-143	329	750	-421	181	44	0.243
H18	249	354	-105	545	823	-278	229	43	0.188
H19	204	395	-191	542	764	-222	178	32	0.180
H20	205	392	-187	589	665	-76	176	32	0.182
H21	196	385	-189	601	726	-125	178	36	0.202
H22	218	380	-162	497	645	-148	160	28	0.175
合計	3,622	5,208	-1,586	9,547	11,905	-2,358	2,555	523	0.205

- ・自然動態は出生数がゆるやかに下がってきている一方、死亡数は徐々に増加している。
今のペースでいくと、この流れは更にどちらも加速していくのではないかと。

・社会動態では転入者数は年々減少してきているが、転出者数の減少は若干低いように思える。この転入者数の低さは市内企業の数、力そのものが力をなくしつつあるのも一因ではないか。

・婚姻件数が増加している割には、離婚率が下がっている。富山県は、日本国内においても他の日本海側の県と同様に、離婚率は低い(富山県相対離婚率 0.322)。小矢部市はそれを平均0.205と更に下回っており、夫婦が生活する上では数値上では大変優れた環境であると言えるのではないか。この点からも「夫婦で、家族で住みやすいメルヘンなまち」というものを都心部でPRしてみてもどうだろうか。

3-2 地方別転入の動き

平成22年12月末

平成	県内他		石川県		福井県		関東		東海		近畿		その他		合計	
	転入	転出	転入	転出	転入	転出	転入	転出	転入	転出	転入	転出	転入	転出	転入	転出
8	286	412	106	143	20	13	125	97	56	60	46	53	82	94	721	872
9	316	385	87	131	9	10	80	133	42	64	51	53	85	82	670	858
10	387	425	113	130	3	10	90	91	50	48	49	69	79	74	771	847
11	363	377	92	106	8	7	74	119	53	73	60	55	76	51	726	788
12	409	437	93	145	8	7	79	120	40	52	38	52	72	71	739	884
13	363	416	124	105	12	10	70	134	50	48	43	61	87	70	749	844
14	377	395	125	144	7	11	83	123	27	55	48	55	70	99	737	882
15	358	411	94	103	8	4	80	110	40	44	43	50	68	61	691	783
16	305	367	82	118	8	6	74	99	41	45	42	54	88	85	640	774
17	338	376	74	92	7	9	80	104	32	39	42	60	56	70	629	750
18	246	447	84	101	6	12	55	111	33	50	44	50	77	52	545	823
19	289	400	72	83	13	5	60	115	28	53	27	53	53	55	542	764
20	322	314	69	110	3	6	56	99	29	45	35	50	75	41	589	665
21	330	400	67	90	4	6	60	100	35	35	45	37	60	58	601	726
22	248	340	62	81	3	8	49	89	37	46	33	27	65	54	497	645
計	4,937	5,902	1,344	1,682	119	124	1,115	1,644	593	757	646	779	1,093	1,017	9,847	11,905

・県内からの転入、転出者数が非常に多い。近すぎず、遠すぎず、といった近隣市町村に多くの転入・転出がみられるのではないか。

・石川県からの転入、転出者数は H8年度に比べると4割減となっている。

- ・関東地方への転出者数はあまり変化はみられないが、それよりも関東地方からの転入者数が大きく減少している。社会動態も含めた企業誘致等の更なる動機づけが必要か。
- ・東海近畿地方からは、あまり大きな変化は見受けられない。

※関東地方への、いなか暮らしのPRを積極的に展開してみてもどうか。またあまり効果のあがっていない近畿地方へのPR拡大も図ってみれば、新たな転入が期待できるのではないか。またその為には小矢部市としても、田舎暮らしに対するバックアップ体制や、就労支援方法等を検討しなければならないだろう。



地区	0~4		5~9		10~14		15~19		20~24		25~29		30~34		35~39		40~44		45~49		50~54		55~59		60~64		65~69		70~74		75~79		80~84		85~89		90~94		95~99		100~		合計	比率	世帯平均	生産人口 高齢者		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女								
石動	75	91	94	133	142	125	173	152	184	150	139	130	153	133	186	191	192	181	205	209	222	217	219	237	350	335	263	275	188	269	228	290	179	233	59	183	30	91	10	20	2	9	3,293	3,654	6,947	21.5%	3.0	1.70
南谷	10	6	12	10	17	16	19	17	29	24	21	16	24	18	27	14	17	14	23	38	36	36	44	33	57	47	25	36	31	48	33	41	29	37	11	22	3	15	2	3	0	0	470	491	961	3.0%	2.7	1.65
埴生	102	79	112	106	113	106	123	96	114	101	115	105	128	125	175	162	151	132	129	142	168	139	147	146	183	208	148	133	104	126	96	115	61	105	38	64	11	34	0	9	0	1	2,218	2,234	4,452	13.8%	3.2	2.67
松沢	54	60	58	48	56	56	61	57	76	70	79	76	93	84	99	84	79	89	84	94	88	96	105	114	154	138	92	84	62	96	69	81	49	71	20	50	7	16	4	9	1	3	1,390	1,476	2,866	8.9%	3.2	2.55
正得	30	28	47	46	46	36	33	40	28	40	45	32	53	43	56	49	46	42	39	45	49	59	53	42	59	53	36	44	34	34	38	57	28	47	12	20	2	11	1	6	0	0	735	774	1,509	4.7%	3.9	2.45
荒川	30	39	45	52	44	43	50	53	41	46	44	45	64	53	86	66	62	54	54	56	54	53	67	103	123	94	84	75	44	53	48	50	30	54	16	33	6	18	0	5	1	2	993	1,047	2,040	6.3%	3.5	2.44
子撫	11	14	16	22	22	15	19	24	34	24	36	24	31	29	37	35	21	28	22	28	41	31	37	47	60	62	36	29	25	31	26	43	29	57	15	40	5	22	3	16	1	1	527	622	1,149	3.6%	3.1	1.77
宮島	4	5	5	6	11	16	8	12	15	7	14	6	13	7	14	11	13	11	12	15	22	23	32	21	32	27	18	21	19	22	23	21	20	25	7	20	3	3	2	2	0	1	287	282	569	1.8%	3.1	1.52
北蟹谷	18	30	19	15	22	23	43	33	44	36	25	29	35	31	34	28	30	31	51	49	49	45	65	49	62	58	51	49	45	61	44	77	44	50	27	40	3	18	1	9	0	1	712	762	1,474	4.6%	3.8	1.59
若林	24	20	43	32	49	21	38	33	34	38	36	33	38	50	46	54	47	38	48	59	46	43	54	54	60	67	47	54	39	55	52	48	21	47	16	25	5	11	0	1	0	0	743	783	1,526	4.7%	3.7	2.18
津沢	59	63	65	53	74	57	59	53	78	66	82	91	100	80	95	89	75	63	77	75	83	90	107	102	119	134	99	98	61	78	63	94	44	74	28	48	6	21	4	10	0	1	1,378	1,440	2,818	8.7%	3.2	2.36
水島	33	37	41	27	37	23	59	33	52	41	52	53	67	54	63	47	36	48	46	58	69	84	88	81	105	89	62	66	45	59	41	72	39	73	21	40	11	24	2	10	1	1	970	1,020	1,990	6.2%	4.0	2.16
藪波	40	44	57	44	48	39	33	39	55	34	61	50	76	69	65	73	57	55	47	45	50	70	83	92	118	106	68	57	42	46	43	47	40	84	27	47	7	28	1	10	0	1	1,018	1,080	2,098	6.5%	3.1	2.33
東蟹谷	22	17	32	24	26	27	38	29	40	34	34	33	56	33	51	43	29	28	40	43	38	47	77	72	79	65	41	41	39	47	32	51	26	44	15	33	5	20	2	6	0	0	722	737	1,459	4.5%	3.8	2.26
南部	7	16	7	10	13	7	10	8	8	16	8	15	22	10	17	15	8	9	14	14	15	11	20	19	21	20	13	18	14	22	15	18	7	17	3	6	1	7	0	1	1	0	224	259	483	1.5%	4.0	1.96
計	519	549	653	628	720	610	766	679	832	727	791	738	953	819	1,051	961	863	823	891	970	1,030	1,044	1,198	1,212	1,582	1,503	1,083	1,080	792	1,047	851	1,105	646	1,018	315	671	105	339	32	117	7	21	15,680	16,661	32,341	100%	3.5	2.11

◆小矢部市の地域別人口分布図、並びに比率等を表及び図に明示してみた。

・小矢部市はやはり広い。しかも平地から山間部まで、非常に起伏に富んでおり、住民サービスを行う上では行政的にもかなりの負担が生じるのが分かる。

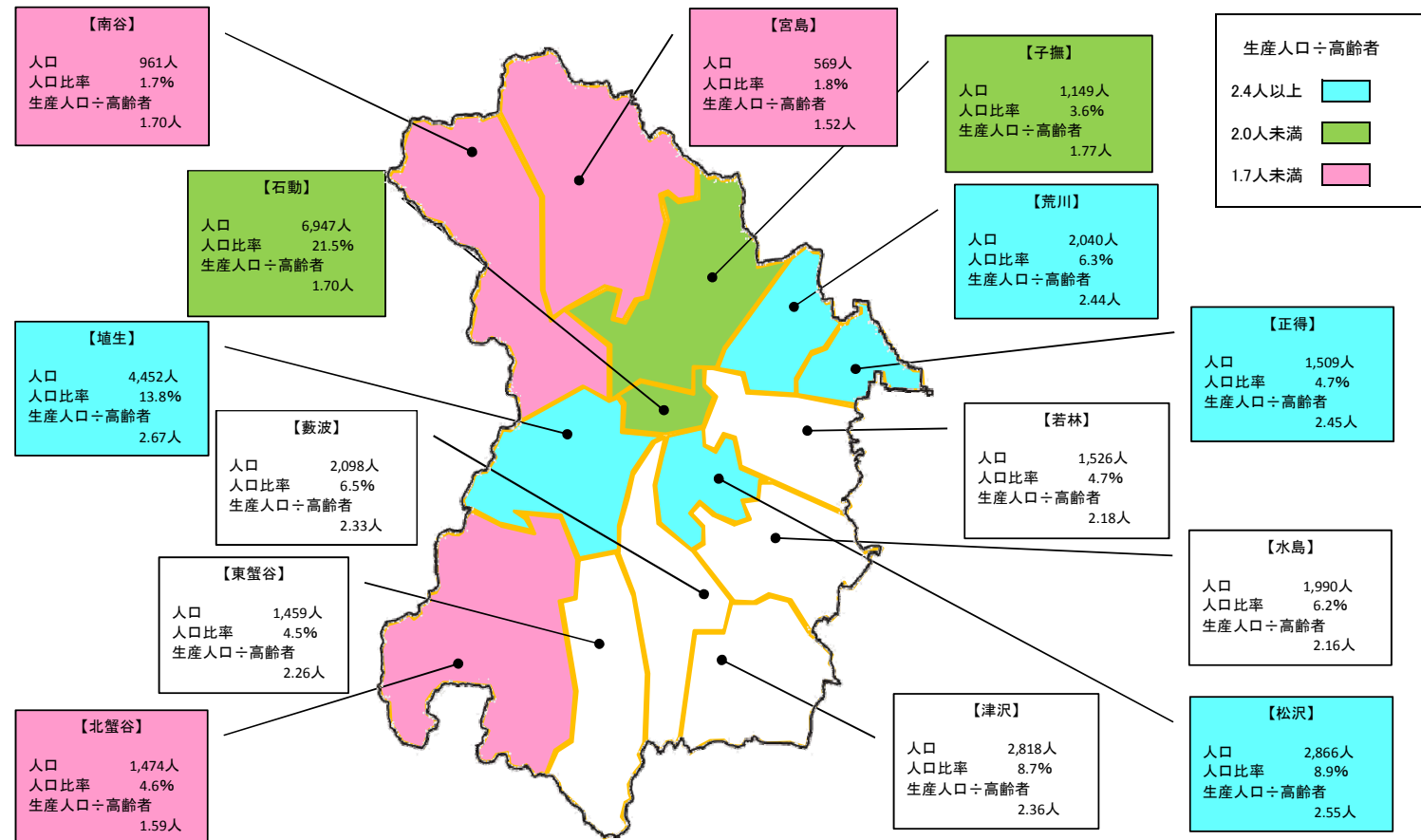
・やはり山間部の高齢化がかなり進んでいるのがよくわかる。特に宮島地区、南谷地区の高齢化が進んでいる。この地区は買い物難民対策、また、冬場の除雪対策等、高齢者対策が特に急務であるように思える。

・意外に感じたのが、石動地区である。人口は6,947人と市人口全体の21.7%を占めているが、まちなかで高齢化率が進みつつある。今後、この地区は高齢化が急速に、かつ一気に進むことが考えられ、その対策が急務である。

また、防災面からしても、石動地区は旧市街がそのまま残っており、火災に対する防災計画が厳しいのではないだろうか。防災計画も含めたまちなか再開発計画の策定が急務であるように思える。

・小矢部市においても人口の推移が石動の中心地区から近い、又は隣接した郊外地域である埴生地区、松沢地区、正得地区に生産人口が増えているのが分かる。

後述するが、中心部であるまちなかから、何かと制約の少ない郊外への生産人口の移り変わりが、小矢部市内においても見受けられる。



3-4 小矢部市人口の移り変わり 現状分析のまとめ

小矢部市の人口推移 予測

	1990年	2000年	2010年	2020年	2030年	
小矢部市人口 計(人)	36,374	34,625	32,170	28,910	25,389	
	●		→ -11%	●	→ -21%	
0~14歳	6,570	4,637	3,601	2,537	2,010	
	●		→ -45%	●	→ -44%	
15~64歳(A) 生産人口	23,687	21,850	18,986	15,313	12,704	
	●		→ -19%	●	→ -44%	
65歳~(B) 高齢者率	6,107 16.8%	8,137 23.5%	9,584 29.8%	11,060 38.3%	10,675 42.0%	
	●		→ +56%	●	→ +17%	
A÷B	3.8人	2.6人	1.9人	1.3人	1.1人	
75歳~			5,476	6,087	7,180	
			●	→ +11%	●	→ +18%

※参考文献 IIHOE[人と組織と地球のための国際研究所] 代表者 川北 秀人氏 講演より

上記表は川北氏が講演内にて話されていた、小矢部市の今後移り変わるであろう小矢部市の推移である。

この表からすると、今現在、小矢部市は2人の生産人口で、1人の高齢者を支えているわけだが、これが2030年になると、ほぼ1人の生産人口で1人の高齢者を支えなければならない。その結果、ヘルパー等の福祉にかかわる社会保障費等の増加が予想され、また、それに反比例して市税の減少等、収入面での衰退が考えられる。

そうすると、既存インフラの補修経費等も必然的に削減せざるをえず、道路や橋、建物等のインフラを維持するだけでも大変な状況となってくるのではないだろうか。

またそれに伴って、居住者の減少は地域のコミュニティ機能の弱体化も進み、将来的には伝統的な祭りや伝統芸能を維持できない等、文化面での問題も発生する可能性がある。

4. 事業目的

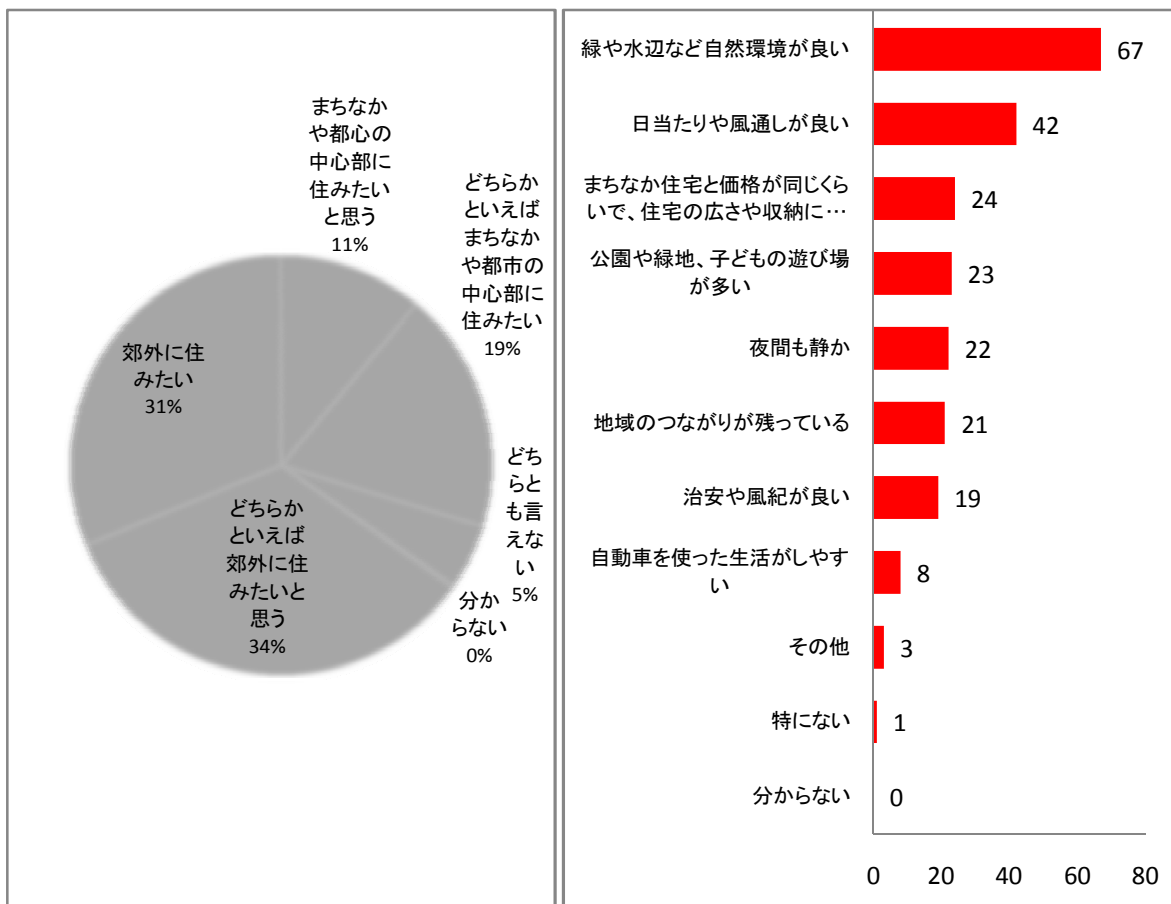
これらの状況を回避する為にも近年、日本全国で様々な対策が練られている。我が小矢部市としても市役所、市議会、または民間有志によって多くの議論がなされている状況である。それらをふまえながら、私たち小矢部市まちづくり研究会3期生としても、私たちがのりまちなか居住、定住促進、高齢化対策等というものを考えることで、小矢部のまちづくりの未来を考える一助となることを目的とする。

5. まちなか居住に関するアンケート調査

それでは次に まちなか居住、並びに郊外居住に関する分析を行ってみたい。

内閣府が2004年度に行った世論調査によると、市内中心部(まちなか)に住むよりも郊外に住宅を求めると答えた人の割合が、全体の3分の2に及んでいる。これは人口50万人以上の大型都市、並びにその都市の周辺の見がかなり集約されているようなので、そのまま小矢部に通じるかという、そうでもないように思える。

【Q:まちなかと郊外のどちらに住みたいですか？】【Q:なぜ 郊外に住みたいのか】



しかしながら、今現在の小矢部市の状況を見ると、郊外に若いファミリー層向けの住宅が建てられても、まちなかではあまりみられない。これはまちなかには昔ながらの建物も多く、敷地面積が必然的に限られて、またそこに住宅を建てる際の制約や法令規制等がかかってくるのかもしれない。しかも同じ家を持つといっても、まちなかと郊外では同価格でも住む家の広さや、建物内のゆとりに大きな違いが生じてしまうのが通例である。また小矢部の核家族の場合、一家に2台ある車を置く駐車場等や子ども達を遊ばせる公園の有無等も重要なポイントの一つになってくるのではないか。

そういった意味からも、まちなか居住をする際には若いファミリー層に対応した住宅整備等、多様なまちなか居住ニーズに十分に応える体制がまだまだ必要なように思える。

まちなかは買い物がしやすい、駅や病院に近い等、住む条件面では非常に優れている。しかし、だからといって「狭くて価格が高い土地」では、なかなか新たな社会動態の創出が見られないのではないか。そのあたりの対策、補助も含めた解決策を見出すべきではないか。

今現在、小矢部市では市民協働が活発になされている。民間のPFI等とも連携しながら、効率的なまちなかの再開発、再生がなされないものか。次に全国的なまちなか居住に関する流れを記す。

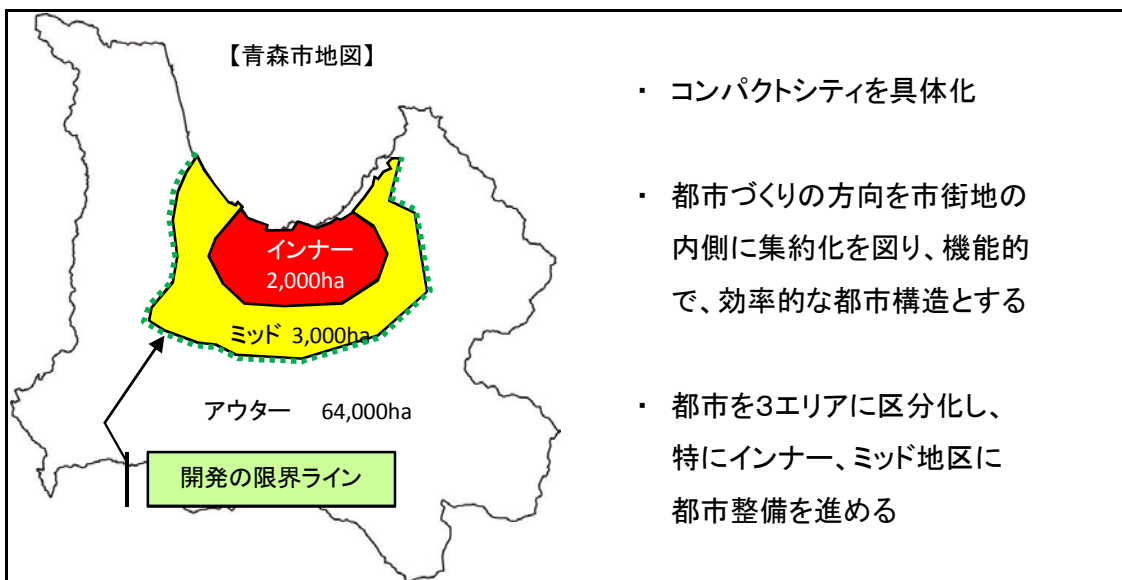
6. まちなか居住に関する流れ

こうした郊外への人口流出が進む中で、日本各地でまちなか居住の意義、重要性が改めて認識され様々な施策がなされるようになった。

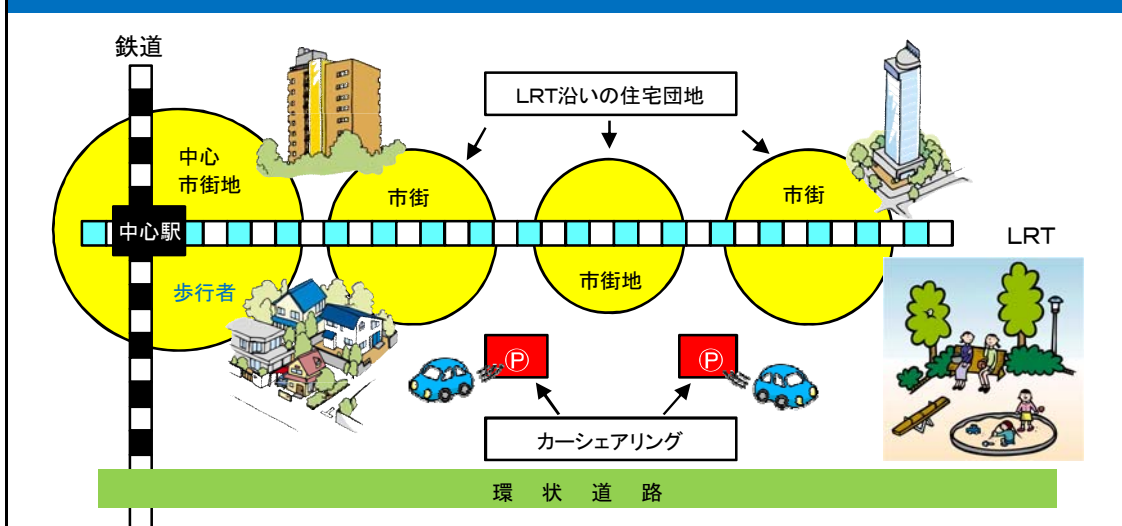
6-1 コンパクトシティ計画(青森市・富山市等)

郊外のインフラ整備には大きなコストがかかり、また効率もあまりよくない。そこで郊外開発を抑制して、まちなかに居住機能を移そうとする流れがコンパクトシティである。これは都市をインナータウン、ミッドタウン、アウタータウンと3区分化し、中心部(インナー・ミッド)に公共投資を重点化する都市計画プランを持つものである。

【青森市 コンパクトシティ計画図】



富山市コンパクトシティの概要 都市機能を集中させる地区(お団子)を公共交通網(串)でつなぐ



6-2 まちなかに人を呼び戻す

◆市街地再開発事業

市街地再開発事業は、敷地を共同化し高度利用することにより、公共施設用地や有効な空き地等を新たに生み出す手法である。富山市においては 富山グランドプラザがそれにあたる。権利者の資産を再開発ビルに等価で置き換えることを基本にし、事業費から補助金等を差し引いた額相当で保留床を処分して、事業費収支を合わせるものである。

この手法では、保留床を住宅用マンションとして整備、販売することによって、まちなか居住性の向を促進することとなる。また木造密集住宅地の不燃化とオープンスペース確保による防災上等のメリット等もあげられる。

Ex.1 市街地再開発事業例 1

【富山・大和デパート】



富山市総曲輪3丁目、西町、一番街の一部
組合員数46名
敷地面積 6,800平方メートル
事業費 123.5億円

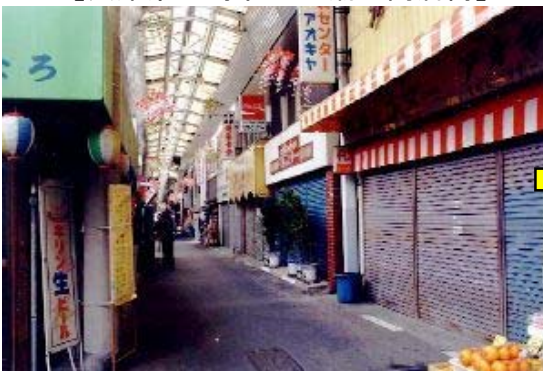
【堤町通り一丁目地区活性化協議会】



富山市堤町通り1丁目
権利者数7名
敷地面積 1,462平方メートル
事業費 21億円

Ex.2 市街地再開発事業例 2

【兵庫県尼崎市 旧・潮江商店街】



【新・Cocoe尼崎】



6-3 低未利用地の用途転換による集合住宅の例

まちなかで発生した工場跡地等の低未利用地を活用して、集合住宅を建設する方法は大都市圏を中心に広く行われてきた。

地方圏においても工場跡地や平面駐車場等のまとまった低未利用地を活用した集合住宅建設の動きがみられる。

このような民間の動向に対し、公共側で公営住宅を併設したり、敷地周辺整備や除雪対策等を講じて、まちなかに積極的に民間投資を誘発する制度を講じる自治体もある。

Ex.1 兵庫県尼崎市 JR尼崎駅前 旧キンビール尼崎工場

JR尼崎駅前は、キンビール尼崎工場やクボタ等の大型工場が住宅と共に混在していた。急激な人口増加に反比例した道路等の公共施設の未整備地区は、防災的にも非常に危険な地域となっていた。この地区を、駅前とまちなか居住の促進により、まち全体の構造を大きく見直した例である。

【兵庫県尼崎市 旧・JR尼崎駅前】

- ・JR尼崎駅前に大きなキンビール工場があり、その周囲に住宅が散在していた。



【新・尼崎駅前】

- ・今ではホテル、タワーマンション等が建ち、防災面でも道路区画整理等も併せて行なわれた



Ex. 2 大都市圏における再開発

大阪アメニティパーク(OAP)



三菱金属 大阪製錬所跡地



マンション、テナントビル、帝国ホテル大阪

恵比寿ガーデンプレイス



エビスビール工場跡地



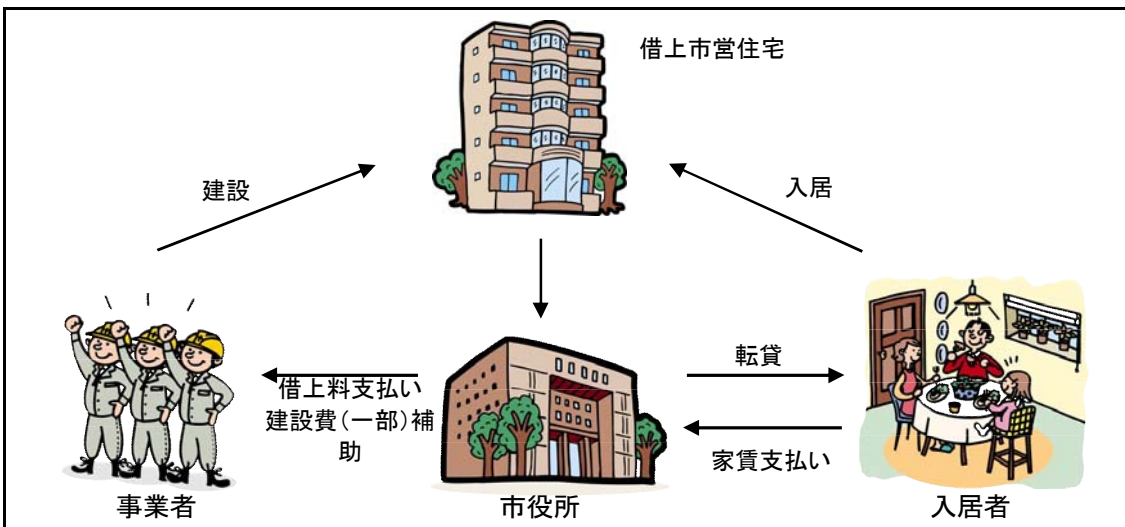
マンション、テナントビル、ウェスティンホテル東京

6-4 借り上げ式公営住宅の運営

借り上げ公営住宅制度は、土地所有者、民間事業者が建設する集合住宅を公営団地が借り上げて公営住宅として転貸する制度である。

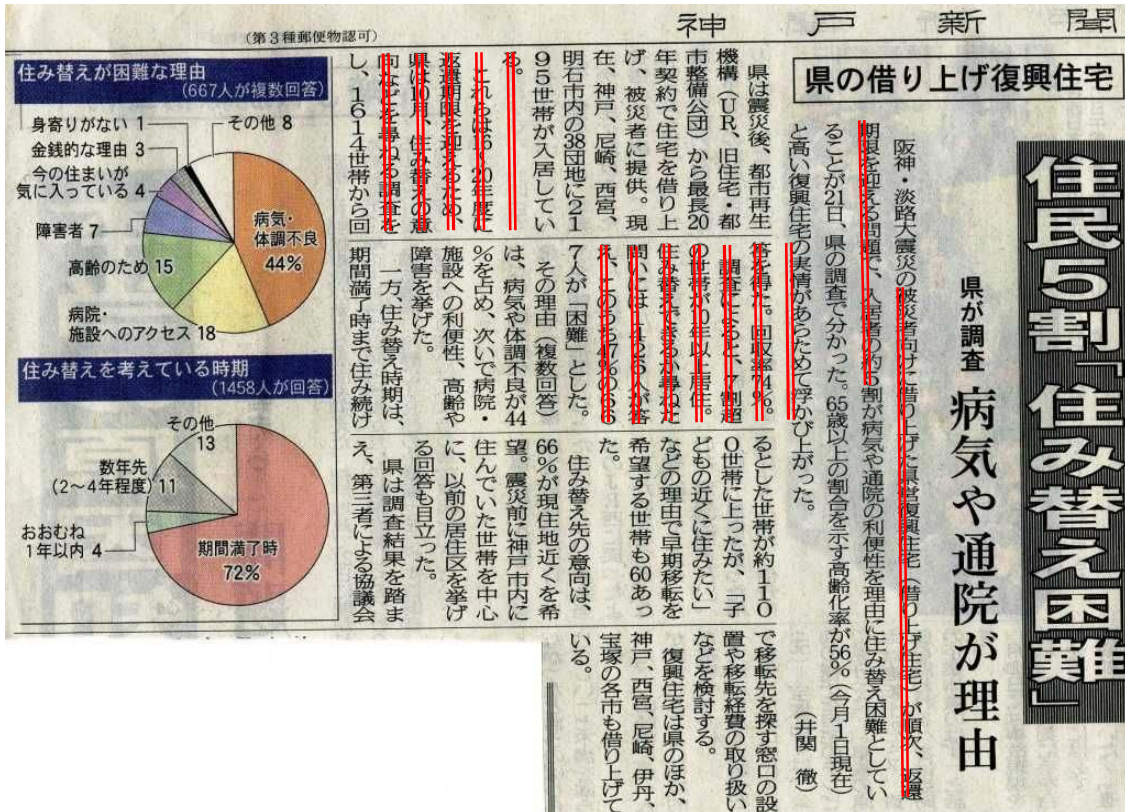
これは行政側にとってはイニシャル投資が少なくなり、民間側からすると当面のリスクが回避されるため、1996年の国の制度化を受け、日本全国に普及した制度である。

民間の資金とノウハウを活かして、公共サービスの提供を行なうもので、PFIの一つのパターンといえる。



行政側にとっても、どんどん減少していくまちなかエリアを再開発、整備することで新たな借り上げ住宅を造れば、大きな人口増が期待できるものである。

※この方法は、阪神淡路大震災で被災された方に対して、行政側の借上げ期限の打切り問題が新たに発生しており、この解決には官民一体となった話し合いが急務な状況である。



6-5 コンバージョン

中心部の空きビル(オフィスビルや商業ビル等)を用途転換し、住宅などとして利用する方法がコンバージョンである。

これによりまちなかの遊休施設の解消と居住人口減少の同時解消が図れる。また、環境に配慮した循環型社会を実現していく上でも、既存施設を有効に活用し、建設廃材発生を抑制するコンバージョンは優れた手法である。

しかしこのコンバージョンには 消防法や建築基準法といった法規制のクリアや、金融機関からの融資額が低いこと、また耐震性能における問題点等の様々な問題も抱えている。

【門司港レトロにみるコンバージョンの事例】



旧三井倶楽部(宿泊施設)



展示場(重要文化財)



旧門司税関



美術館



旧大阪商船

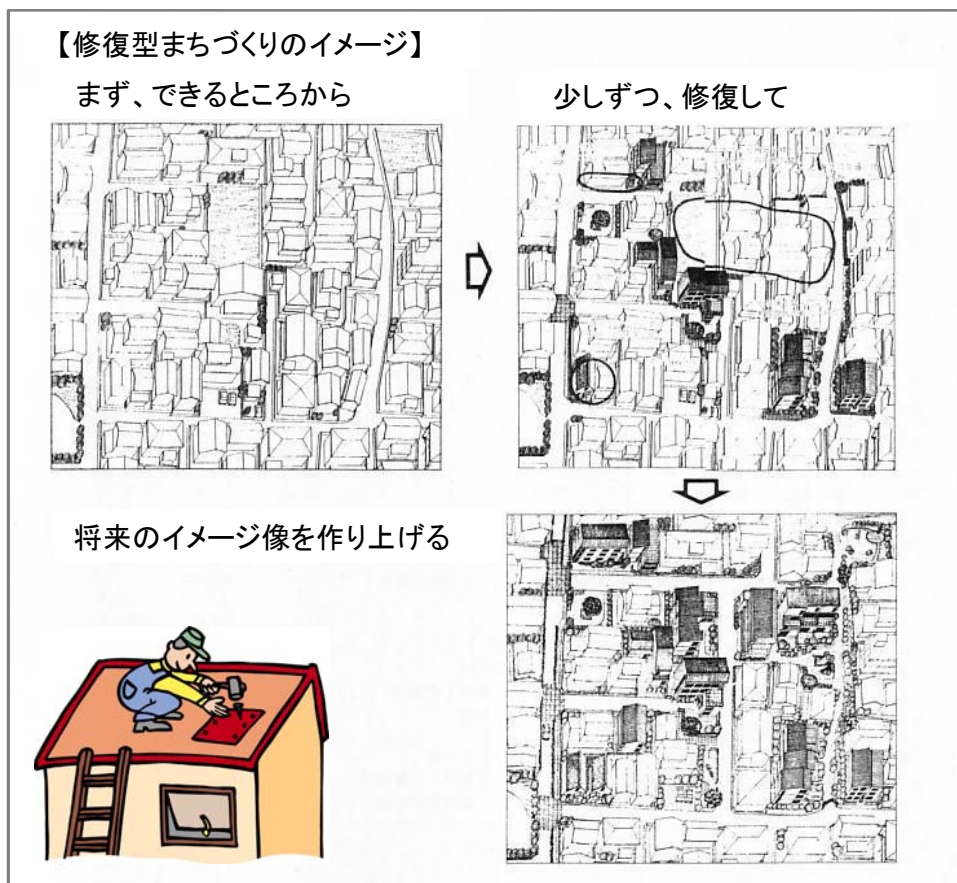


ギャラリー

※コンバージョンを行うことで、建物に新たな付加価値が生まれる。その付加価値をいかに地元のニーズや景観にあわせて再生していくかが、非常に重要なポイントになる。

6-6 修復型まちづくり

これまでの手法が、比較的大規模な集合住宅を建設するものであるのに対し、修復型まちづくりや改善型まちづくりと呼ばれる事業は、小規模な独立住宅が密集する市街地で、単体では建築基準法上の接道要件を満たさないような住宅を共同して建て替える手法である。これにより老朽化した住宅の建て替えや周辺の住環境の向上が図られ、まちなかに住み続けることを可能とするものである。



6-7 小矢部市にとって、どのようなまちづくりが最適なプランなのか

今までに記したように 各県、市町村、地域によって まちづくりに対する取り組みは様々である。どれがベストで、どれがダメか等といったことは一概に言えないのがまちづくりである。

だからこそ、まずは地元住民や市民が一体となって、来たるべき高齢化社会を小矢部市が乗り切るために想定されるであろう諸問題に、取り組んでいかなければならないのではないのか。

また、その取組そのものも、どのような方法でどの辺りまで議題を煮詰めていくのか、その習熟度によっても変わってくるものである。

そのためにも、何らかの会議体の場を設け、積極的に官民協働で将来のまちづくりについて議論してみてもどうだろうか。

7. 小矢部まちビジョン プロジェクト

まちづくりの話を一から進めようとする、と、相当な時間がかかり、またそこには多くの労力が必要となる。そしてまた、各市町村によって状況や背景、または社会状況等、事情は色々なものがあり、各市町村ごとでそのニーズやウオントは様々である。

小矢部市においても、これからますます高齢化が進み、まちなかの空洞化、人口の衰退等、多くの問題を抱えることで、問題解決は最重要課題の一つといえる。

そんな中、小矢部市では1%まちづくり事業など、多くの協働のまちづくり事業が展開されており、これはまちの力を官民一体となって盛り上げている。このボトムアップ型のパワーを、まちづくりにも活かすことができるのではないか。

まちづくりには、市民の土地や金銭面、また労力など、多くの協力をいただきながら、官民一体となって創りあげていかなければならない。ここでは、この重要な問題の解決に取り組むための、市民協働でのまちづくり会議体の創設を提案したい。

7-1. 官民一体 協働のまちづくり

今現在、様々な地域や場面でまちづくりへの市民の参加機会等が増えている。もはや、この協働作業なくしてまちづくり活動は動かなくなりつつある。

この背景には ① 都市計画の課題が、都市の拡大に対応した広域的インフラ整備から、住民生活により近いレベルの環境整備に移ってきたこと。

② 「良いまちをつかっていく」という市民意識が高まったこと

が挙げられる。

【過去の協働のまちづくりニーズ】

道路、建物等、ハード面でのまちづくりが主だった



【現在の協働のまちづくりニーズ】

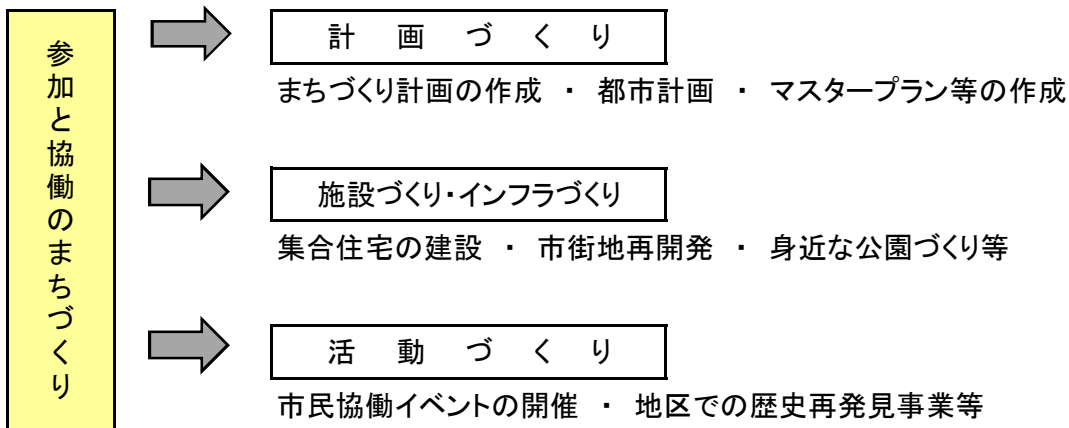
市民の環境レベルが上がってきたことによるソフト面でのまちづくりも強まる



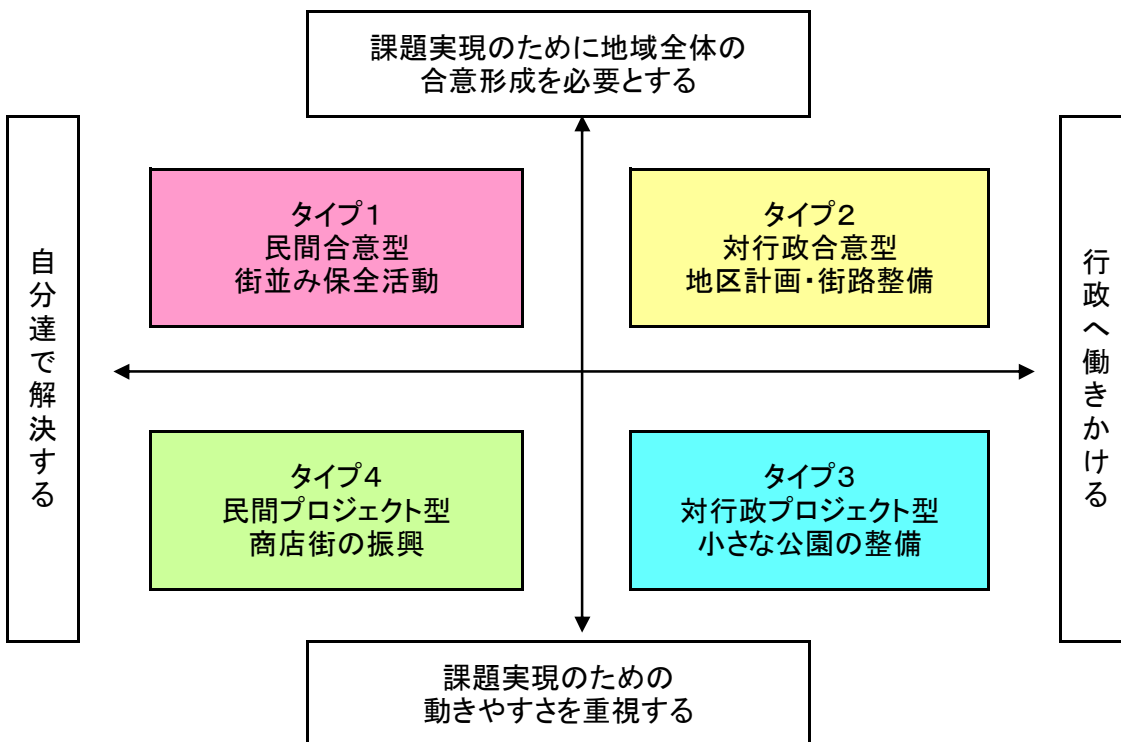
7-2. 様々な段階での参加と協働

協働のまちづくりに参加するといっても、構想や計画づくり等、これまで行政が行ってきたプロセス面でのまちづくりもあれば、共同住宅の建設や公園整備等の身近な施設整備、イベントや街を支える様々な活動へと広がっている。

大都市ではない小矢部市としても、まずは市民の皆さんから意見をいただく会議体の創設から始めてみてはどうだろうか。「**小矢部まちビジョン プロジェクト(仮称)**」の創設



また、まちづくりには様々なタイプのものがある。協働型まちづくりを進める上での体制整備は、まちづくりの課題をどのように解決していこうとしているのかによって異なる。この場合、検討が必要となるのは「地域全体の合意を必要とする」あるいは、「限られたメンバーで機動的に動く」という軸と「自分達で解決する」あるいは「行政に働きかける」という軸の2軸面から考える必要がある。



「まちづくり教科書 第1巻 まちづくりの方法」より

7-3. まとめ

小矢部市としても総合的なまちづくりに関して、今現在抱えている問題、そしてこれから先に起こるであろう諸問題に関して、さらに議論を重ねるべき時期がきつつあるように思える。

かつては、まちづくりというものは行政が行なうもの、という風潮があったが、それは高度成長期時代に市民がみんな一丸となって、ものづくりに励んでいた時代のことではないだろうか。

ある程度インフラ整備の整った現代にあって、人々の生活基盤そのものが平準化されるようになり、暮らしのスタイルそのものが満たされるようになってきた。すると、新たなニーズやウォンツが生まれてくるようになり、また家族やライフスタイルそのものの在り方も変わってきた。また、変わってくるであろう未来にあって、まちづくりに対する思いや要求は移り変わっていくものである。

「市民協働」が明確に打ち出されるようになった小矢部市としても、今現在、多くのまちづくり団体が様々な活動を行っている。それらの各種団体は、それぞれの思いをもって「市民協働」そして「まちづくり」を行っているわけだが、そろそろ20年後の小矢部市を見据えた、大きな枠での小矢部のまちづくりを考える時期が来ているのではないだろうか。

そのためにも、「小矢部まちビジョン プロジェクト」の立ち上げ、運営を切に希望する。

